

COWBOY DUST AND SAMURAI SNOW

『カウボーイの埃、武士の雪』



カウボーイの埃、武士の雪

ガンファイターと屯田兵

日米フロンティアの交錯と帝国の相貌

本書は英語で書かれた作品を日本語に訳した試し読み版です。巻末に、アメリカ西部史の固有名詞を簡単に説明した用語集を付しています。

プロローグ

アリゾナの乾いた峡谷の静寂を、リボルバーの撃鉄を起こす硬質な金属音が切り裂く。

約八千キロ彼方、北海道の深雪のなかでは、スナイダー・エンフィールド銃の重い尾栓が跳ね上がり、薬室へ弾薬が押し込まれる。

1870年代、相まみえることのなかった二人の男が、過酷なフロンティアのただなかで全く同一の冷酷な力学に直面していた。「一瞬の躊躇が生死を分かつ」。一人は油の染みたデニムをまとい、陽炎の向こうに潜む牛泥棒に目を凝らしながらコルト.45の弾倉を確かめていた。もう一人は廢刀令によって佩刀を奪われた元士族であり、官給品の粗末な毛織物に身を包み、単発のスナイダー銃を手に膝まで埋もれる粉雪を踏みしめながら、飢えた脱走囚や巨躯のヒグマの気配に全神経を研ぎ澄ませていた。

言葉も違えば、掲げる旗も異なっていた。しかし二人は等しく、紙の上の境界線を恒久的な帝国の版図へと変えるべく荒野に投じられた、国家の「犠牲的先鋒」であった。

カウボーイブーツを履き、ステットソン帽の鏢を深めに引き下ろすときのあの独特の感覚——荒野を踏みしめるその足取りに、躊躇いは無用だ。日本の開拓史を知る人にとって、フロンティア・スピリットは決して遠い異国の物語ではない。アメリカ西部のカウボーイを深く見つめれば、そこには日本自身が切り拓いた過酷な辺境の歴史が、鮮やかに重なり合っていることに気づくはずだ。

荒野の地平線の彼方へ、その歴史の真実を辿る旅を始めよう。

第1章：荒野の地平線への誘い

1870年代、西部の大地に最初の銃声が轟き、蝦夷地の原生林に大木が打ち倒される前、ワシントンと東京の指導層は全く同じ悪夢に苛まれていた。「地図の上の国境など、血と肉によって満たされない限り、単なる線に過ぎない」と。明白なる使命（マニフェスト・デスティニー）と明治維新の激動の中、二つの世界が並行して交錯した。一方はアメリカ西部を揺るがす乾いた蹄の音、もう一方は北国の雪を踏みしめる旧武士たちの重い足音。太平洋に隔てられながらも、両者は「版図の征服」という冷厳な国家意志によって等しく突き動かされていた。

アメリカの開拓民や牧畜業者が日干し煉瓦の町で無法者と火花を散らしていた頃、明治政府の官僚たちは凍てつく北の針葉樹林帯で、驚くほど酷似した拡大政策を推し進めていた。両国の歩みは、測ったかのように同調していたのである。南北戦争後のアメリカ西部がホームステッド法（自営農地法）を契機として爆発的な入植を遂げたのと軌を一にして、日本は開拓使を設置し、1875年（明治8年）に琴似へ最初の屯田兵村を築いた。近代化を急ぐ明治政府は、合衆国農務局長（現職）ホレス・ケプロンをはじめとする顧問団を招聘し、農業の青写真、機械、家畜をそのまま導入して、北海道の地に欧米型の農牧地を創出せんとしたのである。

開拓に伴う激痛もまた瓜二つであった。ワイアット・アープがトゥームストーンのような鉱山町で実力による秩序維持に奔走していた頃、明治の監獄から送り込まれた囚人たちは原生林の峠に「囚人道路」と呼ばれる軍事動脈を削り出し、屯田兵はアメリカ西部のグリズリーにも比肩する巨大なエゾヒグマの脅威と隣り合わせて越冬していた。

合衆国にとって、ミシシッピ川以西の原野は神から約束された運命の地であり、外国勢力や先住民族に先を越されることは国家の命運に関わる危機であった。近代国家として産声を上げたばかりの明治政府にとっても、蝦夷地という北の辺境は無防備で凍てつく急所であり、南下政策を強める帝政ロシアの脅威に晒されていた。両国は広大な空白の地図を見つめ、自らの脆弱性を直視し、他国に呑み込まれる前に自らの手で荒野を平らげるという冷徹な決断を下したのである。

アメリカの至上命令：マニフェスト・デスティニー

アメリカにとって、西部への版図拡大は神の摂理という熱狂的な言辞で彩られていた。1840年代に「マニフェスト・デスティニー（明白なる天命）」という標語が喧伝されると、それは新興共和国が大陸全土を覆い尽くすための道徳的な大義名分となった。この理念は領土拡張の野望や土地の収奪、そして先住民族に対する無慈悲な強制移住を正当化する免罪符として機能した。

拡大の原動力となったのは、剥き出しの個人主義である。ホームステッド法に後押しされた開拓者、牧場主、一攫千金を狙う山師たちは幌馬車に家財を積み、地平線を目指した。彼らは土地と富、そして人生の再起を賭けて、半乾燥の平原、灼熱の荒地、峻険な峠へと殺到した。彼らの背後には連邦政府の軍事力——騎兵隊の砦や条約を破棄する立法措置——が存在していたが、日々の生活の次元において、西部開拓とは無秩序で自律的な人間の濁流そのものであった。

明治の対抗策：北の錨（アンカー）

地球の反対側における日本の辺境政策は、より計画的であり、同時に国家存亡の危機感から生じたものであった。1868年の明治維新を経て誕生した新政府は北方を睨み、蝦夷地を人がまばらな荒野のまま放置すれば、ロシア帝国が裏口から土足で踏み込んでくるという抜き差しならぬ危機感を抱いてい

た。その焦燥は極めて根深いものであった。日本の封建経済の基盤であった伝統的な稲作は、北海道の極寒と短い積算温度、酸性の火山灰土壌の前には無力であり、旧来の小作農を移住させても餓死するほかなかった。東京の指導部には、民間の入植者が数十年かけて自然発生的に北へ浸透していくのを待つ余裕はなかった。北の防壁の構築に失敗すれば、産声を上げたばかりの近代日本の主権そのものが瓦解しかねないという認識のもと、極寒の過酷な原野を短期間で開拓し、要塞化し、殖産興業の拠点へと変貌させねばならなかったのである。

アメリカ西部の自律的で混沌とした拡大とは対照的に、明治政府は北海道開拓を国家主導の大規模なシステム工学プロジェクトとして推し進めた。独立した開拓民の自発的な移住を待つのではなく、国家が入植の全工程を直轄したのである。外国人顧問団を招き、アメリカ式の農業計画、家畜、大型農機具を導入し、自然を力づくで手なづけようとした。そして北辺の防衛線を維持するために、軍事と開拓を兼ね備えた特殊な防衛組織を編成した。それこそが、禄を失った旧士族からなる屯田兵であった。

鎖に繋がれた先鋒：苛烈なる道路開削

アメリカのフロンティアが幌馬車の車輪によって切り拓かれたとすれば、明治日本の北辺は、重い鉄の鎖と打ち振るわれる斧によって切り拓かれた。鎖に繋がれていたのは、悪名高い「囚人道路」の開削に従事させられた受刑者たちである。数千人におよぶ重罪犯や国事犯（政治犯）が足枷で繋がれ、極寒の原生林へと送り込まれた。ロシアの脅威に対抗すべく軍用道路を急造しようとした国家にとって、彼らは使い捨ての労働力に過ぎなかった。そして斧を振るったのは、囚人のみならず屯田兵も同様であった。先祖代々の刀を取り上げられた旧士族たちは、重い伐採斧を握りしめ、原生林の巨木や根を切り開いた。この無骨な鉄の道具こそが、北の防壁を支えた真の礎であっ

た。荒野を屈服させ、帝国の境界を血と汗と木材によって打ち固めるための、国家権力の物理的な現れであった。

北海道を孤立した原生林から対ロシアの軍事拠点へと変貌させるため、政府は何よりもまず兵站インフラを欲した。1880年代後半、北海道庁と集治監は数千人の囚人を動員し、札幌とオホーツク沿岸を結ぶ戦略道路の開削のため北の奥地へと送り込んだ。これが、後世に語り継がれる「囚人道路」の建設である。

泥濘と猛吹雪に閉ざされた峠の光景を思い描いてほしい。鉄の足枷によって二人一組で繋がれた男たちが、黎明から日没まで手作業で巨木を伐り倒し、岩盤を穿ち、凍てつく急流に橋を架けた。彼らは厳重な監視のもと、丸太を組んだだけの粗末な仮小屋（タコ部屋）に押し込められ、飢餓、脚気、凍傷、そして凶暴なエゾヒグマの襲撃に晒された。

過酷を極めた工事の過程で数百人もの受刑者が命を落とし、その遺体は掘削された道路の傍らに仮埋葬された。これが今なお各地に残る「鎖塚」である。アメリカの西部開拓が自営農民の過酷な旅路とトレイルの悲劇によって刻まれたように、明治の北海道の礎は、国家権力による囚人労働の血と骨の上に築かれた。個人主義的な富への渴望であれ、中央集権的な国家の勅令であれ、フロンティアの征服が常に甚大な人間の犠牲を対価として要求したという事実には変わりはない。

二つの地平線、ひとつの力学

スケールや文化の差異を脱色すれば、双方の領土拡張の根底にある力学は完全に一致していた。アメリカ西部も明治の北海道も、国家安全保障と「文明化」という大義名分のもと、空間を掌握し、天然資源を開発し、先住民族の自立性を無力化するために国家が主導した一大事業であった。

二つの辺境を見渡すとき、荒野に分け入ったカウボーイと北海道の開拓民は、鏡に映る互いの姿であったことがわかる。過酷な孤立のなかで鍛えら

れ、容赦なき自然環境の洗礼を受け、時代の荒波のなかで国家の先鋒として原野に押し出された男たちであった。

空白の地図を描く：制度としてのフロンティア政策

入植地の最初の杭が打たれ、最初の詰所が建てられる前に、二つのフロンティアの征服は机上の紙の上で始まっていた。

アメリカにおいて、版図拡大は議会立法を通じて推し進められた。1862年に制定されたホームステッド法（自営農地法）は、単に市民を西部へ誘っただけでなく、彼らを領有の尖兵として制度化した。過酷な自然に耐え、5年間にわたって定住・耕作を成し遂げた者には、約65ヘクタールの公有地が無償で付与された。連邦政府は先住民族の領土に測量線を引き、法的には未だ完全な実効支配を確立していなかった土地を開拓民に分配した。入植者の大群がすぐさま現地を埋め尽くし、事実上の支配を確立することを見越していたからである。

太平洋の反対側で、明治政府は刻一刻と迫る地政学的危機に直面していた。徳川幕府を暴力的に打倒して成立した新政府の首脳陣は、津軽海峡の北に横たわる広大な蝦夷地を強い焦燥感をもって見つめていた。北東アジアでは、ロシア帝国がシベリアを掌握し、樺太から千島列島へと着実に南下していた。日本が北の島を松前藩時代のような曖昧な統治と先住民族の漁場のまま放置すれば、西欧列強の侵食を招くことは火を見るより明らかであった。

明治政府が開拓使を設置し、北方の防備を固めると、北海道は日本の産業革命を牽引するための巨大な資源基地としても位置づけられた。国家の統制下に置かれた島は、単なる北方防衛の砦にとどまらず、複数の戦略的産業を担うエンジンとして構想されたのである。

1. 西洋型農牧業の拠点化

温暖な本州向けの伝統的稲作が亜寒帯の気候に適合しなかったため、国家は北海道を西洋式の近代農業・酪農地帯へと改造することを目指した。ホレス・ケプロンをはじめとする外国人顧問が持ち込んだ青写真のもと、大規模な模範農場、果樹園、牧場が建設され、近代化を急ぐ日本が必要とする牛肉、乳製品、羊毛、小麦の供給地とされた。

2. 石炭資源の開発と鉱山事業

北海道の地下には膨大な鉱物資源が眠っていた。明治政府は、日本の急成長する蒸気船、鉄道、製鉄所を稼働させる主燃料として、空知や夕張をはじめとする豊富な炭田の開発を最重要課題に据えた。

3. 林業・木材供給のハブ

鬱蒼と生い茂る原始林は、単に切り開くべき障害物ではなく、近代化のための貴重な資材であった。東京をはじめとする都市部の建築用木材を供給し、産業用木炭の増産を支えるため、大規模な製材事業が各地で立ち上げられた。

4. 水産資源の産業化

かつて先住民族が自然の恵みとして営んでいた沿岸漁業を再編・産業化し、サケ、ニシン、昆布の大規模な商業漁獲事業を展開した。これらは国内市場の食糧や肥料（鯨粕）として流通し、莫大な富を生み出した。

1869年（明治2年）、政府は蝦夷地を正式に「北海道」と改称し、開拓使を設置した。その政治的意図は明白であった。ここはもはや異境の辺境ではなく、日本帝国の不可分な北の要衝であると内外に示したのである。

官僚機構、泥と雪に会う

アメリカ西部と明治の北海道の双方を、単なる無秩序な人口移動から隔てていたのは、国家による強力な誘導と介入であった。

アメリカの開拓民がミシシッピ川を越えて西進したとき、その背後には常に合衆国陸軍の砦、騎兵隊の哨戒路、そして荒野を整然とした碁盤の目状に分割する連邦測量局の技師たちが控えていた。北海道の開拓民が北へ向かったとき、彼らの手には開拓使の給与地割当証、太政官布告、そして外国人技師が製図した開発計画書が握られていた。

双方の統治機構は、フロンティアにおける根本的なパラドックスを冷徹に理解していた。すなわち、軍隊だけでは国境を永続的に維持することはできない。兵士は外縁を一時的に制圧できても、その土地を国家の領土として固定できるのは、土に根を張る開拓農民だけである。

1870年代初頭、二つのフロンティアの舞台は完全に整えられた。ワシントンと東京は境界線を引き、国家の意志を宣言し、自国の民を動員した。残されたのは、机上の政治理論を血と汗と泥にまみれた生活へと変える先鋒——「生きた杭」を荒野へ打ち込むことだけであった。

第2章：人間の楔（ヒューマン・ウェッジ）

地図の上にどれほど端正な境界線を引こうとも、線そのものが領土を守るわけではない。生身の人間を定住させて初めて、国境は実体を伴う。

敵意に満ちた広大なフロンティアを版図に組み込むため、両国は古来の戦略的手法に依存した。すなわち、「人間の楔」の投入である。彼らは単なる浮浪者を送り込んだのではない。荒野を開墾し、境界を防衛し、内外の脅威から版図を死守するための、規律ある先鋒部隊を配置したのである。

彼らの定住がなければ、地図上の国境線など、列強の思惑次第で容易に書き換えられる羊皮紙に過ぎなかった。アメリカ西部においては、他国や先住民族が領有権を主張する前に、無数の入植者や牧場主が大陸の中央平原を物理的に占有する必要があった。そして北の日本において、その要請ははるかに切迫したものであった。シベリアからサハリンを経て南下するロシア帝国の圧力を前に、北海道の土を耕し、木を伐り倒し、峠を守る確固たる国民の存在がなければ、北の防壁は空洞化し、帝国の裏門をロシア軍に明け渡すことになりかねなかったのである。

アメリカの先鋒：入植者と法執行官の神話

アメリカ西部における「人間の楔」は、開拓民、鉱夫、牛飼いたちが入り乱れる混沌とした集合体であった。補給路沿いに雨後の筍のごとく出現したブームタウン（新興鉱山町）は、暴力と投機、目まぐるしく変わる利害関係が渦巻く火薬庫となった。

利害関係者としての「法」

ワイアット・アープとその兄弟のような男たちは、抽象的な正義に仕える無私無欲の公僕などではなかった。彼らは地方政治、町の利権争い、そして莫大なカネが動くビジネスに深く関与していた。アープ兄弟はトゥームストーンの商業エリート、酒場経営者、そして共和党系の市政マシンと緊密に結びついていた。一方、彼らの仇敵となったクラントン家やマクロリー家、そして「カウボーイズ」と呼ばれた緩やかなネットワークは、町の統制外で動く農村部の牧畜業者や国境を越えた牛取引の利益を代弁していた。

権力闘争の道具としてのバッジ

連邦保安官補や町保安官のバッジを佩用することは、アープたちに法執行という名の正当な暴力を独占させた。それは町の手数料を徴収し、ライバル陣営の商売を監視し、敵対勢力を排除するための合法的な武器となった。「O.K.コラルの決闘」やその後の血生臭い報復行（ヴェンデッタ・ライド）は、憲法上の権利を守るための正義の戦いなどではなく、銀で潤う町における絶対的な経済的・政治的覇権を巡る血で血を洗う縄張り争いであった。

現地の視点

国境を越えて物資を運ぶメキシコ系住民、牛泥棒の被害に怯えながら自力で群れを守る独立系の牧場主、あるいは町の有力者と繋がりのない一般の渡り者たちにとって、バッジを胸に付けた武装集団は平和の守護者というより、暴力を独占した威圧的なギャングに見えた。彼らは法の執行官という外皮をまとった、商業資本の警備部隊に過ぎなかったのである。

史実：コチス郡における死闘と追跡

当時のアメリカ辺境において「一線を引く」ことがいかに過酷であったかを知るには、1880年代初頭のアリゾナ南東部、埃にまみれた現実を見ればよ

い。

北海道の入植者たちが、過酷な使役から逃亡した囚人による襲撃の恐怖に怯えていた頃、アメリカの法執行官たちもまた、凶暴な捕食者たちと対峙していた。駅馬車強盗や、コチス郡の無法地帯を根城にする国境地帯の牛泥棒たちである。

クラントン＝マクロリー一派やスケルトン・キャニオンの待ち伏せ事件の犯人を追跡した保安官や追跡隊（ポッセ）の過酷な試練を想起されたい。駅馬車が襲撃され、牛の群れが国境の南へ消えたとき、追跡劇はハリウッド映画のような整然とした決闘などではなかった。それは灼熱の荒野のなか、水が尽きかけ、あらゆる岩陰に伏兵の影がちらつく乾燥した涸れ谷や峻険な峠を何日も彷徨う、剥き出しの生存競争であった。

北海道の屯田兵が凍てつく原生林のなかで脱走囚の足跡に目を凝らしていたように、アリゾナの保安官たちもまた、失うもののない無法者たちを求めて陽炎立つ低木林を走査していた。両者ともに文明の刃の先端に立ちおり、一瞬の判断の狂いが砂や雪のなかの無名墓へと直結することを知っていたのである。

今日トゥームストーンを訪れば、正義の執行者ワイアット・アープの英雄談が語られる。しかし、神話化された伝説の底には、民間や半官半民の暴力に依存した国家建設の過酷な現実が横たわっている。アメリカ西部において、秩序の拡張は分散化され商業化された暴力に委ねられていた。民間の鉱山シンジケート、商人、地元の政治派閥がガンファイターを用心棒や保安官に任命し、私有財産を保護させ、利権を維持させていたのである。

この傾向は鉱山地帯で顕著であった。政府の保安官組織があまりに手薄で広大な資産を防衛できないと悟った富裕な鉱業資本は、独自の私設警備隊を組織し、ピンカートン探偵社やウェルズ・ファーゴの武装護衛を雇って、山峠を越える金銀の輸送や遠隔地の坑道を防衛させた。

この構図は、明治政府が直轄部隊として軍事植民者を厳格に管理していた北海道の政策とは鮮やかな対照をなす。アメリカの秩序が民間の利害対立と私的暴力の摩擦を通じて形成されたのに対し、明治日本は最初から権力を中央に集約し、没落した武士階級を国家の正規の防衛・開拓機関へと再編したのである。

北の防壁：刀を捨て、鋤を握った侍たち

広大な海を隔てた地で、明治政府もまた深刻な社会秩序の危機に直面していた。ただし、そこには日本特有の事情があった。日本には西部のガンファイターや雇われ保安官はいなかったが、何百年も続いた身分制度の解体により、一夜にしてその存在意義を奪われた数十万人の武装解除された旧武士——士族が存在していた。秩禄処分によって家禄を打ち切られ、廃刀令によって佩刀を禁じられた多くの武士が、極度の経済的困窮と精神的漂流のなかにあった。開拓使の記録や公文書は、この武士階級の解体危機が国家のフロンティア政策と直結していたことを示している。

1874年（明治7年）、開拓次官・黒田清隆は太政官に決定的な建議を提出した。屯田兵制度の創設である。これは二つの重大な国家課題を同時に解決する策であった。すなわち、南下するロシアの脅威から北方国境を防衛すること、そして困窮する旧士族たちに生活の糧と名誉ある任務を与えることである。政府は土地の無償付与、防寒住宅、扶助料の支給を単なる植民の手段ではなく、武士階級の経済的救済と国家への再統合のための公式な道筋として提示した。

しかし、彼らが営む開墾生活の底には、紛れもない軍事能力が秘められていた。彼らは単なる入植農民ではなかった。武士道の規律と刀槍の修練を受け、西洋式の銃陣訓練を施された数千人の戦闘集団であり、法なき原野に移植された正規兵であった。国境紛争が勃発したり反乱が起これば、彼らは鋤

を捨てて瞬時に精鋭部隊へと変貌する準備を整えていたのである（事実、西南戦争において屯田兵は実戦に投入され、その戦闘能力の高さを示した）。

東京の首脳陣が下した決断とは、この武士の力を帝国の防壁へと転用することであった。地政学的な仮想敵はロシア帝国であったが、日常的な直接の脅威は島の内部に潜んでいた。屯田兵は、過酷を極めた強制労働に従事させられていた集治監（刑務所）から脱走する凶悪な囚人や脱走兵から、初期の入植地を防衛する任も担っていた。極限の使役によって追い詰められた脱走囚たちは深い原生林へと逃げ込み、開拓民にとって不気味な脅威となっていたのである。

1875年（明治8年）、政府は札幌近郊に最初の屯田兵村である琴似兵村を開墾させた。彼らは先祖伝来の刀を置き、官給単発のスナイダー銃と重い伐採斧を手にして未踏の大地へと踏み出していった。

史実：琴似の黎明

1870年代半ば、凍てつく霜に閉ざされた札幌の夜明けを想像してほしい。粗末な屯田兵屋で目を覚ました元侍が、わらじの代わりに重い防寒靴を履き、ウールの官服をまとい、単発のスナイダー銃を担いで氷点下の外気へと踏み出す。彼の任務は、原生林を切り倒して畑を開墾し、入植地を自給自足へ導くと同時に、雪深い林の奥から忍び寄る巨大なヒグマや、脱走囚の影に警戒を怠らないことであった。

エゾヒグマの脅威は、開拓民の想像を絶するものであった。アメリカの入植者たちが対峙したグリズリーと同様、北海道のヒグマは圧倒的な巨体と強靱な生命力を誇り、人間の侵入に対して獰猛な縄張り意識を剥き出しにした。飢えた巨熊はときに脆弱な板壁の兵屋を叩き壊し、開拓地を恐怖の底に叩き落とした。

この過酷な自然環境に拍車をかけたのが、脱走囚という生々しい脅威であった。絶望と飢餓に駆られ、人間性を摩滅させた受刑者たちが、入植地の

周縁を徘徊していた。屯田兵の家族にとって、夜の帳が下りた森の奥は二重の恐怖を孕んでいた。冬の飢えに狂う猛獣か、失うもののない凶悪犯か。いずれにせよ、一瞬の油断も許されなかった。

何千キロも離れた太平洋の向こう側、アリゾナの乾燥した盆地でも、星のバッジを佩用した保安官がリボルバーのシリンダーを回転させ、地元の私怨や牛泥棒との衝突が即座に命取りになることを自覚しながら朝日の中へ踏み出していた。彼もまた、世界の果てのような町で不安定な秩序の維持を担っていた。トゥームストーンのような場所では、法と無法の境目は極めて曖昧であった。無法者たちは物陰に潜んでいるだけでなく、指名手配書のポスターから睨みを利かせ、ときに町の通りを堂々と闊歩していた。

大地にしがみついて生きようとする家族にとって、無法者たちは日常を脅かす不断の恐怖であった。アリゾナの荒地で牧場を襲う盗賊であれ、北海道のタイガへと逃亡する脱走犯であれ、彼らは生存のための冷酷な掟に従って生きていた。太平洋を挟んだ双方の開拓民は、枕元に銃を立てかけて眠る生活を余儀なくされていたのである。

海によって隔てられながらも、北の雪原で凍える明治の屯田兵と、南西部の砂漠を駆けるアメリカの保安官は、いずれも国家の意志を体現する切っ先であった。彼らは単なる個人的な野心や贖罪のために荒野へ向かったのではない。国家の境界を打ち固めるべく、中央政府によって大地へと打ち込まれた「統治の楔」であった。だが、旗を立て、杭を打つことは序章に過ぎなかった。統治の楔が定着したとき、双方は最も根深い歴史の現実と直面することになる。すなわち、その大地を古くから「我が家」としていた先住民族の存在である。

第3章：征服の代償

統治の楔は土地を切り拓き、外縁を維持することはできる。しかし国家は、そこに何世代にもわたって暮らしてきた人々を周縁へ追い遣るまで、真にフロンティアを領有することはできなかった。

19世紀後半、ワシントンと東京は国家建設の最終段階において同じ障壁に直面していた。地図製作者の測量線や帝国勅令よりも遥か昔から大地に根を下ろしてきた、先住民族の主権と伝統である。アメリカ西部において、これは一世紀におよぶ血生臭い衝突、破棄された条約、そして保留地（インディアン・レザベーション）への強制移住という悲劇を生んだ。明治の北海道においては、アイヌ民族の狩猟採集文化の体系的な解体、伝統儀礼の禁止、そして「文明開化」の名の下に進められた同化政策であった。

軍服や国旗、政治的プロパガンダを剥ぎ取れば、太平洋の両岸で驚くほど似通った悲劇が展開されていた。南西部の荒涼たる溪谷で追いつめられるアパッチ族の戦士であれ、神聖なイオマンテ（熊送り）を警察権力によって禁じられたアイヌの長老であれ、自らの大地と尊厳を奪われる人間の苦悶は痛ましいほどに同一であった。

理念としての排除：天命（プロヴィデンス）対 進歩（プロGRESS）

合衆国において、先住民族からの土地の収奪は「マニフェスト・デスティニー」という宗教的確信によって正当化された。白人キリスト教文明が大陸を充たすことは神の意志であると信じ込まれ、先住民との条約は便宜的な時間稼ぎに過ぎず、金鉱が発見されたり牛の放牧地が必要になれば容易に反故にされた。

太平洋の反対側で、明治政府は異なる語彙を用いながらも、実質的に同一の同化・排除の仕組みを展開した。蝦夷地を北海道と改称して編入した際、明治政府はアイヌを固有の主権を持つ独立した先住民族とは認めなかった。行政上の分類として彼らを「旧土人」と規定し、戸籍制度に組み入れる一方で、伝統的な生活様式を奪っていったのである。

この政策は、一方的な布告と法制度を通じて冷徹に執行された。初期の土地政策において、アイヌの先祖伝来の猟場や聖なる流域は「無主地」と宣言され、国有地として没収された上で開発事業や入植者に払い下げられた。この収奪の集大成となったのが、1899年（明治32年）の「北海道旧土人保護法」である。同法はアイヌの家庭に少額の農地（1戸あたり最大5町歩）を給与する形をとったが、そこには農業への転換を義務付ける過酷な条件が付されていた。土地を受け取っても一定期間開墾しなければ没収されるという規定は、数千年にわたり狩猟や漁労によって生計を立ててきた民から、最後の生活基盤を奪い去る結果を生んだ。ワシントンがドーズ法によって保留地を細分化し先住民族の土地を解体したのと同様、明治政府もまた、近代法制の名の下にアイヌの自立的な生活圏を解体したのである。

開拓使や庁府県は、河川でのサケ漁や毒矢によるシカ猟といった伝統的営みを「野蛮」「非効率」と断定した。1878年（明治11年）、沙流川流域においてアイヌの伝統漁労道具であるマレク（鉤鉚）やウライ（筥）の使用が厳禁され、漁場は近代的な商業漁業者へと売り渡された。冬の主要な食糧源を絶たれた人々は、慣れない小作農への転換を余儀なくされ、困窮を極めたのである。

史実：国境地帯のアパッチと沙流川のアイヌ

この政策がもたらした人間の苦痛を理解するには、政策文書の行間を通り抜け、歴史の激流に呑み込まれた人々の姿を直視しなければならない。アリゾナとメキシコの国境地帯で一族の自由を守るためにゲリラ戦を戦った

チリカウア・アパッチの戦士と、北海道日高の沙流川沿いで生きてきたアイヌの狩人の境遇は、驚くほど重なり合っている。両者ともに、先祖代々受け継いできた生き方が、遙か彼方の首都に座る官僚の手によって、ある日突然「違法」と宣告された世界を生きていた。

アリゾナでは、高地松林の奥深くへ逃れたアパッチの追跡者が過酷な二者択一を迫られていた。配給が滞り病魔が蔓延する不毛な保留地へ投降するか、銃を手に騎兵隊の包囲網を突破し続けるか。彼らは砂漠の涸れ谷や水場の位置を隅々まで知り尽くしていた。しかし彼らを執拗に追いつめたのは、合衆国陸軍に雇用され、銃と給与を与えられた同胞のアパッチ・スカウトたちであった。

何千キロも離れた北海道でも、沙流川の凍てつく朝に立ったアイヌの狩人が同じ絶望に直面していた。かつて激流に銚を打ち、雪を踏み分けてエゾシカを追った聖なる森には、官吏や巡査の監視の目が光っていた。カムイ（神々）に感謝し魂を送り返すイオマンテは禁止され、生活の刃物は取り上げられ、日本語の教育機関において母語であるアイヌ・イタク（アイヌ語）を話すことは厳しく罰せられた。

二人の男——峡谷の自由を守ろうとしたアパッチと、川の恵みを守ろうとしたアイヌの狩人は、近代産業国家という巨大な機構の前に、敗れ去るほかなかった。

制度の罫：保留地と保護法

実力による制圧は第一段階に過ぎなかった。軍事的・治安的な境界線が確立されると、中央政府はより永続的な同化の道具——行政文書と法律を展開した。

アメリカにおいて、連邦政府は1887年のドーズ法（一般土地割当法）を制定し、部族全体の共有財産であった保留地を個人ごとに細分化して割り当

て、先住民族に私有財産の観念と定住農業を強制した。そして余った土地は「余剰地」として白人入植者に売り払われ、保留地の面積は激減した。

太平洋の対岸において、明治政府は1899年の北海道旧土人保護法によって酷似した結果を導き出した。「保護」という慈悲深い名称とは裏腹に、同法はアイヌを法的に旧土人と規定して固有の文化的主権を制限し、不慣れな農耕を義務付けた。寒冷な火山灰地で農耕に馴染めず荒廃させた土地は国家に回収され、誇り高き狩猟民族は、自らの故郷において土地を持たない最下層の窮民へと追いやられていった。

言葉や形式は違えど、ワシントンと東京は同じ帰結へと至った。自給自足を営んでいた先住民族を、国家の施しに依存せざるを得ない保護観察の客体へと変えてしまったのである。

これらの並行する歴史を検証することは、日米両国をいたずらに弾劾するためではない。むしろ、近代国家の輝かしい発展の陰に隠された、決して消し去ることのできない代償を直視するためである。この厳然たる歴史の現実
に光を当ててこそ、我々は近代という時代の真の土台を理解することができる。

日常の抵抗：文化の記憶を未来へ繋ぐ

言語を奪われ、伝統の生業を禁じられ、法的な周辺へと追いやられたとき、生き延びることそのものが抵抗となる。

南西部の峻険な岩山の奥深くや、北海道の雪深きコタン（集落）において、先住民族の家族たちは過酷な監視の目をかいくぐりながら、静かな、しかし強靱な文化の継承を続けた。

アパッチをはじめとする部族にとって、サンダンス（太陽の踊り）などの儀礼は反乱の火種と見なされ当局によって禁止されたが、彼らは儀式を地下へと潜らせた。夜更けの焚き火の傍らで、長老たちは子供たちに口頭伝承を

語り聞かせ、騎兵隊の砦が築かれる以前の川の名、星々の配置、先祖の神話を記憶に刻み込ませた。

北海道のアイヌもまた同様であった。公の場での儀礼が禁じられるなか、板壁の家の奥でユーカラ（叙事詩）の朗誦が密かに続けられた。文字を持たない彼らの言葉は、母から子へ、祖母から孫へと囁かれ、神々（カムイ）への祈りと自然への畏敬は途絶えることがなかった。木彫りの技やイナウ（御幣）を削る手先の記憶は、国家の力をもってしても消し去ることはできなかったのである。

第4章：紙の青写真と凍てつく銅

今日、観光客として札幌の街を歩き、白亜の時計台を見上げ、北海道大学のポプラ並木を散策すれば、誰もが胸のすくような開拓の英雄談に迎えられる。

記念碑の銅板の上で、ホレス・ケプロン将軍は北海道開発の父として称えられている。彼がアメリカから最新の農牧業、果樹栽培、そして整然とした碁盤の目の都市計画をもたらし、未踏の原生林を一挙に近代文明へと導いたと記されている。

しかし、歴史学の現場や開拓使の公文書に分け入れば、そこには美化された伝説とは大きく異なる、生々しい挫折と摩擦の記録が現れる。東京の政府が欧米列強への体面のために外国人顧問の功績を過大に宣伝した一方で、実際の開拓史とは「アメリカの机上の理論が北国の泥濘に足を取られ、無残に立ち往生した壮大な試行錯誤」の歴史であった。

記念碑は、国庫から流出した莫大な予算、閉ざされた庁舎内での激しい対立、そして北海道の酸性土壌に合わずに遺棄された重厚なアメリカ製農機の残骸については語らない。何よりも、輸入された青写真が破綻した現場で、それを知恵と汗によって実用的な技術へと作り変え、厳寒の荒野を切り拓いた無名の日本の開拓者たちの功績が、英雄談の陰に覆い隠されてきたのである。

高価な救世主

明治政府がなぜ巨額の報酬を払ってまでアメリカ人の顧問団を買い入れようとしたのか。その背景には、1870年代初頭の指導層を覆っていた強烈な焦燥感があった。

宗谷海峡の向こう側でロシア帝国が着々と軍備を増強するなか、日本の伝統的な農業技術は北海道の過酷な気候に対して無力であった。何千人もの元士族や農民を寒冷のタイガへ送り込み、暖地性の作物で養うことは不可能である。開拓民が飢えれば北方防衛は崩壊し、帝国の門戸はロシアの前に開け放たれる。

日本には、試行錯誤を重ねて寒冷地農業をゼロから確立する時間の猶予はなかった。早急な成果を求めた開拓使は、即効性を期待して「西欧の近代技術を一括導入する」決断を下した。

1871年（明治4年）、開拓次官・黒田清隆は荒野を開拓する技術を求めて渡米し、グラント政権下で合衆国農務局長（現職）を務めていたホレス・ケブロンに白羽の矢を立てた。ケブロンは19世紀アメリカの典型的なフロンティア開発者であり、未開の自然を保護の対象ではなく、蒸気機関とプラウ（犁）によって克服すべき機械的对象と見なしていた。黒田は年俸1万ドルという、当時の閣僚をも遥かに凌ぐ破格の待遇を提示し、地質学者や技師を含む顧問団とともに彼を日本へ招聘したのである。

泥濘のなかの挫折

意気揚々と北海道に上陸したケブロン一行は、中西部の大農場で威力を発揮していた最新鋭の大型モルトボード・プラウ（山型畝立犁）、播種機、収穫機を陸揚げした。ケブロンは石狩平野を見渡し、機械化された広大な小麦畑が地平線まで広がる情景を描いていた。

しかし、鋼の刃が大地に打ち込まれた瞬間、その壮大な夢は泥の中に砕け散った。

ケブロンの重厚なプラウは、アメリカ中西部の肥沃で石のない深土のために設計されたものであった。北海道の大地において、その刃は密生する強靱な笹の地下茎（クマザサ）と、火山灰土の下に埋もれた無数の巨岩に撥ね返された。刃は曲がり、フレームは歪んだ。さらに決定的な誤算は、日本在来

の農耕馬（どさんこ）の体格であった。荷物を背負う駄馬として飼育されてきた小柄な在来馬には、ぬかるんだ春の湿地で巨大なアメリカ製鉄犁を牽引する馬力は到底備わっていなかったのである。

高額な対価を支払って輸入された近代農機具の多くは、実用に耐えぬまま倉庫の隅に押し込められ、官僚主義の過ちを物語る鉄の記念碑として錆びつくに任された。

さらに事態を悪化させたのは、ケプロン自身と現地の生活環境との著しい乖離であった。屯田兵や入植者たちが氷点下のバラックで飢えと凍傷に震えている間、ケプロンは任期の多くを東京の快適な洋館で過ごし、高踏的な意見書を送りつけるばかりで、予算を巡って開拓使の官僚たちと衝突を繰り返した。開拓使が求めたのは困窮する入植者が直ちに飢えをしのげる現実的な施策であったが、ケプロンが固執したのは巨額の資金を要する模範農場や実験牧場であった。自らの権限が制限されたことに不満を抱いたケプロンは、任期を繰り上げて1875年に帰国した。

現場の知恵が開拓史を書き換える

公的な記録はケプロンの離日を惜別として美しく記述するが、雪の中に残された開拓民たちにとって、生き残りをかけた真の戦いはそこから始まったのである。外国の顧問が去り、錆びた機械が打ち捨てられた後、北海道の運命は名もなき日本人たちの双肩にかかっていた。

彼らには逃げ帰る場所などなかった。作物が実らなければ、冬の寒風のなかで家族が飢え死にするだけであった。

輸入された巨大なプラウが役に立たないと知るや、入植地の鍛冶職人と農民たちは道具の改良に乗り出した。彼らは重すぎる鑄鉄のフレームを解体し、現地の馬でも牽引でき、細かな木の根を切り裂くことができる小型・軽量の和洋折衷型プラウ（小型畜力犁）を自ら鍛造した。

作物の選定においても、現実的な取捨選択が行われた。大規模な小麦農場という非現実的な構想は放棄され、やせた火山灰地でも収穫できるジャガイモ、飼料用トウモロコシ、そして寒さに強いリンゴの栽培へと舵を切った。

住居の構造すらも再発明を要した。障子と畳からなる本州の伝統家屋は北海道の冬には命取りであり、一方で完全な洋風建築は資材費がかさみ隙間風が酷かった。開拓民たちは、太い丸太の柱に急勾配の屋根を乗せ、屋内にアメリカ製の鋳鉄製薪ストーブを据え付け、畳敷きの小上がりと土間を機能的に融合させた独特の寒冷地住宅（屯田兵屋）を編み出していった。

理論を超える現場の力

札幌の観光案内が、泥臭い葛藤の歴史よりもホレス・ケプロンの端正な胸像を好む理由は理解できる。フロックコートを纏った欧米の紳士が近代化の青写真を授ける姿は、国際親善の物語として都合がよいからである。

だが、そうした無菌化された歴史観は、辺境開拓の真実を見失わせる。実際の北海道の自然は、机上の理論などで屈服するほど甘いものではなかった。

北海道の開拓は、異国の將軍のペン先によって成し遂げられたのではない。東京の官僚は近代技術を棚から一括購入できると過信したが、厳しい自然はその傲慢さを容赦なく打ち砕いた。北の大地を切り拓いたのは、アメリカ西部を切り拓いたのと同じ、妥協なき人間の生命力であった。すなわち、机上の計画の破綻を引き受け、役に立たない理論を薪ストーブにくべ、泥にまみれて自らの手で過酷な風土を手なずけた開拓者たちの執念である。

アリゾナの砂塵のなかで牛を追う男と、北国の原野で斧を振るう屯田兵は、本質において同胞であった。彼らは官僚の美辞麗句によって救われたのではなく、自らの力で荒野をねじ伏せたからこそ生き残った。歴史の賞賛が捧げられるべきは、快適な執務室で設計図を描いた理論家たちではなく、膝

まで雪に埋もれながら、凍土の一步一步に血と汗を滲ませて大地を切り開いた無数の開拓民たちなのである。

第5章：鉄と毛皮の重み

石狩川の支流に沿った白樺の林は、風に揺れるのではなく、凍気によって軋んでいた。凍結した梢のすべてが白霜の重みに喘ぎ、乾いた骨のように鋭い音を立てて小枝を散らす。

晩秋の冷気が張りつめる静寂のなか、吐き出す息は肺腑を刺す氷の刃となって白く煙る。足元では、濡れ落ち葉と苔の絨毯が鉄のように硬い凍土へと固まり、風が運んだ薄氷の粉雪に覆い隠されていた。この沈黙の森のなかを、過去の時代に取り残された一人の男が進んでいた。

彼の身には、絹の着物も、先祖伝来の刀もなかった。それらはすべて明治政府の布告によって剥奪され、議会政治と簿記の帳簿を信奉する東京の官僚たちによって過去の遺物と見なされていた。元士族の賢三は、防寒用の毛織の上衣に身を包み、油の染みたズボンを革脚絆に押し込み、使い古した背囊の重い革を胸に斜め掛けしていた。

彼の背中に揺れていたのは、単発のスナイダー・エンフィールド銃である。左腰の帯には、櫓の柄をすぎた重い伐採斧が差してあった。鍛冶屋の手による炭素鋼の刃は、硬く凍りついた白樺や広葉樹の幹を叩き割るために厚く打ち出されていた。

賢三は足を止め、荒い吐息を灰色の幹に吹きかけた。

森の音が完全に途絶えていた。それこそが異常の兆候であった。北の原生林において、カケスの鳴き声が止み、野ウサギの気配が消えたとき、それは森全体が息を潜めていることを意味する。

右手がおのずと背中へ伸び、冷たいスナイダーの撃鉄に親指を掛けた。乾いた金属音が静寂のなかに響く。

その瞬間、異様な臭気が鼻腔を衝いた。松脂の清涼な匂いでも、湿った腐葉土の匂いでもない。獣油の酸化した脂臭、濡れた毛皮が発する濃厚な悪臭——人間の本能的な恐怖を呼び覚ます、原初の捕食者の匂いであった。

エゾヒグマ。

若熊でも、死肉を漁る痩せた個体でもない。冬ごもりに備えて限界まで肉体を肥大化させた、巨大な雄であった。

賢三の心臓が激しく脈打ったが、幾重の修練によって叩き込まれた身体の記憶が即座に恐怖を抑え込んだ。雪を踏みしめて腰を落とし、銃口を構えながら、灰色の白樺が密集する藪の奥へと視線を走らせた。

突如、森が弾けた。

警告の唸り声も、前哨の威嚇もなかった。地を揺るがす突風のような咆哮とともに、黒褐色の大山が下草をなぎ倒して突進してきたのである。

倒木を軽々と飛び越え、雪を巻き上げて突進してくるその姿は、生物というより山そのものが崩れ落ちてくるかのような質量感であった。筋骨隆々たる巨躯、黄色く濁った牙の隙間から吹き飛ぶ泡。濁った瞳は、寸分の狂いもなく賢三の姿を捉えていた。

賢三は逃げなかった。突進してくるヒグマに背を向けた者がどのような無残な死を迎えるか、彼は知り尽くしていたからである。

スナイダー銃の台尻を右肩に密着させ、呼吸を止め、照準器の先端を迫り来る黒い塊の胸元へと合わせた。視界のすべてが一点に収縮する。飛び散る雪煙、凍土を穿つ鋭い爪の音、鼻を突く猛烈な獣臭。

今だ。

引き金を絞った。

轟音とともに銃身が跳ね上がり、強烈な反動が賢三の肩を撃ち抜いた。黒色火薬の煙が視界を遮る。命中した手応えはあった。巨熊の胸元が弾け、鮮

血が純白の雪原に飛び散った。

だが、鉛弾一発の衝撃では、数百キロに及ぶ突進の運動量を止めることはできなかった。

獣は倒れなかった。耳をつんざく咆哮を上げながら、残りの距離を瞬間に詰めてきた。賢三が尾栓を跳ね上げて排莢し、次弾を装填する猶予など微塵もなかった。巨大な前足の一撃が、横合いから銃身を薙ぎ払った。

スナイダー銃は吹き飛ばされ、遠くの雪だまりの中へと消えた。

衝撃でバランスを崩した賢三は背中から雪原へと倒れ込んだ。冷気が背中を貫いた刹那、呼吸を奪うほどの重圧が胸の上にのしかかった。

熱く生臭い息が顔面を覆う。覆いかぶさる巨熊が立ち上がり、頭蓋を粉碎せんと前足を振り上げた。

永遠にも似た一瞬のなかで、賢三の右手は無意識に左腰の伐採斧の柄を掴んでいた。喉の奥から絞り出すような気合とともに、持てる力のすべてを込めて、鋼の刃を真上へと突き出した。

鈍い打撃音とともに、斧の刃が熊の顎下、喉仏の急所深々と食い込んだ。鮮血が間欠泉のように噴き上がり、賢三の顔面と胸元を赤黒く染め上げた。

巨熊が痙攣し、断末魔の叫びとともに横倒しに崩れ落ちた。その重力と肉の塊が賢三の足の上ののしかかり、息絶えた。

吹き荒れる風の音のほか、森には何も聞こえなくなった。荒い息を吐きながら、賢三は灰色の空を見上げた。アドレナリンが引くにつれて、全身を激しい震えと脱力感が襲う。彼は息絶えた巨体の下から必死に足を引き抜いた。

血と泥にまみれ、雪の上にへたり込んだ賢三は、遠くに転がる銃と自らの血塗られた手を見つめた。急所を外していれば、死んでいたのは自分だった。銃の操作を誤り、斧の一撃が逸れていれば、骨も残らなかつただろう。

自分が荒野に打ち勝ったのではない。荒野の神が、たまたま今日、自分を生かしたに過ぎないのだ。

賢三は乾いた笑いを漏らし、凍てつく木立に向かって呟いた。

「俺は、とんだ悪運の持ち主だ」

雪のタイガから約八千キロの彼方、もうひとつの辺境でも、同じように過酷な自然の試練が繰り返されていた。

アリゾナの太陽は、ドラグーン山脈の麓を容赦なく照りつけ、大地を灼熱のフライパンへと変えていた。

岩だらけの尾根は死んだように静まり返り、猛禽でさえ上昇気流の上に静止して動かない。この目眩く光の迷宮のなかを、自らの拳銃の腕前と幸運のみを頼りとする一人の男が進んでいた。

ジェシー・トレントの胸には保安官のバッジはなく、遠い準州都の権力とも無縁であった。汗と埃にまみれたキャンパスの上着に身を包み、擦り切れたブーツを履き、腰のガンベルトにはコルト.45シングル・アクション・アーミーを吊るしていた。肩には十ゲージの水平二連散弾銃を担ぎ、腰には硬い石英を砕くための頑丈なつるはしを差していた。

ジェシーは石灰岩の岩棚の陰で足を止めた。吸い込む空気は熱風となって喉を焼く。

北の森のような重苦しい静寂とは異なり、砂漠の沈黙は乾ききっていた。音が届く前に、足元の岩肌を通じて微かな振動が伝わってきた。男の血を凍らせる、捕食者の気配であった。

ジェシーの右手が反射的にコルトのグリップへと落ち、撃鉄が起こされる。甲高い金属音が灼熱の大気に響いた。

マウンテンライオン（ピューマ）。

迷い出た若い個体ではない。岩棚の頂点に君臨する巨大な雄であり、縄張りを侵した人間に対して殺意を漲らせていた。

藪が擦れる音はしなかった。跳躍は前触れなく訪れた。

警告の威嚇もなく、石灰質の白煙を蹴立てて、筋骨逞しい黄褐色の巨体が空間を切り裂いた。抜き身の爪、獐猛に光る琥珀色の瞳。

ジェシーは動じなかった。この容赦なき砂漠において、背を見せることは喉笛を切り裂かれることを意味した。

散弾銃を構え、狙いを定める間もなく前方の引き金を引いた。

轟音とともに散弾が放たれ、強烈な反動が鎖骨を軋らせた。火薬煙の向こうで散弾が獣の肩を抉ったが、空中を飛来する肉体の運動量は止まらなかった。

丸太のような衝撃がジェシーを薙ぎ倒した。散弾銃は爪の一撃によってサボテンの茂みへと弾き飛ばされた。

硬い岩肌に背中を叩きつけられ、肺の空気が絞り出される。コルトを抜く間もなく、重い肉体が彼を大地に押しつけ、肉食獣の熱い息が首筋を焼いた。牙が喉笛を捉えようと迫る。

朦朧とする意識のなか、ジェシーの左手がつるはしの柄を掴んだ。

絶叫とともに、鋼の切っ先を渾身の力で上方へ突き上げた。

鋭利なピックの先端が喉の下へと深々と突き刺さり、軟骨を粉碎する鈍い感触が手に伝わった。マウンテンライオンは激しく身悶えし、その爪がジェシーの上着を引き裂いた後、力を失って砂塵の上に崩れ落ちた。

ジェシーは灼熱の太陽を見上げながら、長い間その場に横たわっていた。吹き抜ける砂漠の熱風の音だけが耳朶を打つ。息絶えた巨体を押し退け、血と汗を拭いながら起き上がった。

彼は震える手を見つめ、砂の中に転がる散弾銃に目を落とした。

そして、暖れた声で呟いた。

「俺は、世界で二番目に悪運の強い男だ」

だが、二つのフロンティアにおいて、すべての者がこれほど幸運であったわけではない。

アリゾナの砂漠が乾きと熱によって命を奪ったとすれば、北海道の冬は絶対的な沈黙のなかで命を凍りつかせた。厳冬期の数ヶ月、シベリアからの寒風（かんぷう）が石狩平野を吹き荒れるとき、原生林は一切の目印を失う白銀の迷宮と化した。

入植者や屯田兵は北の鉄則を知っていた。ひとたび地吹雪に巻き込まれたなら、その場に留まらねばならない。進み続ければ、原野の標本となるだけである。

しかし、過酷な疲労のなかで、雪に勝てると思い上がる者もいた。

ある年の暮れ、哨戒に出ていたヒロシという名の屯田兵が、天候の急変に見舞われた。空は瞬時に鉛色へと変わり、猛烈な粉雪が視界を遮断した。小屋まであとわずか数キロの距離であった。風は咆哮を上げ、氷の結晶となって彼の眼球を容赦なく叩いた。

ヒロシは頭を低くし、コートを掻き抱きながら前へ進もうとした。踏み固められたはずの道は、一メートル近い雪の下に消え去っていた。

そして、ホワイトアウトがもたらす致命的な感覚喪失が訪れた。上下も左右も判別がつかず、吹き荒れる風は自らの足音さえも呑み込んだ。寒さは顔を麻痺させ、手足を奪い、やがて思考そのものを甘美な無関心——「少し眠れば楽になる」という低体温症の死の誘惑へと変えていった。

彼は倒れまいと足を動かし続けた。だが、兵屋まで数百メートルの地点で、限界が訪れた。氷点下の風が、歩みの途中で彼の心臓の鼓動を停止させたのである。

数日後、嵐が去った青空の下で捜索隊が彼を発見した。ヒロシは雪原の中央に直立したまま、見えない風に向かってわずかに身を傾け、氷の彫像となって息絶えていた。立ったまま凍死していたのである。北の辺境を維持するために支払われた、痛ましい犠牲の姿であった。

太平洋の反対側、アリゾナの荒涼たる丘陵でも、自然は同様に容赦のない通貨で代償を徴収していた。日差しを遮るもののない荒野における、喉の渇きという名の緩慢な処刑である。

ジェシーの遭遇から数年後、山師のミラーは運命を過信してドラグーン山脈の奥地へと入り込みすぎた。荷馬車の車軸が岩に乗り上げて折れ、水場から二十キロ以上離れた砂漠のただなかで立ち往生したのである。

手元にあった二つの水筒は、気温が四十度を超えるなかで一日と持たずに干上がった。

砂漠において、水の枯渇は確実な死を意味した。三日目の正午、動けなくなった荷馬車の陰で、空を見上げる男の頭上に、不吉な影が旋回を始めた。ハゲタカは、獲物の心臓が止まる前から死臭を嗅ぎつける。彼らは近くの低木の枝に止まり、太陽と脱水症状が生ける肉体を無力な餌へと変える瞬間をじっと待っていた。

ミラーは車輪に寄りかかり、ひび割れた唇から血を滲ませていた。すでに立ち上がる力はなく、皮膚は骨の上に張り付いた羊皮紙のように干からびていた。

一羽のハゲタカが、わずか数歩先の岩の上に舞い降りた。彼らは騒ぐこともなく、冷徹な忍耐をもって間合いを詰めてきた。ミラーは追い払おうと腕を上げようとしたが、身体は一切の命令を拒絶した。熱射病によって全身の機能が停止していたのである。

鳥が跳躍し、荷馬車のハブの上へと乗った。太古の捕食者の目が、男の顔を見下ろしていた。

乾いた喘ぎを漏らす間もなく、鋭利なくちばしが正確無比に突き出され、男の眼球を刺し貫いた。

男は叫ぶことすらできなかった。喉は灰のように乾ききっていた。彼は残された片方の目で、獲物を飲み込んだ鳥が、再び嘴を振り下ろすのをただ見つめるしかなかったのである。

北海道の吹雪のなかで直立したまま凍死しようと、アリゾナの太陽の下で生きたまま鳥に啄まれようと、フロンティアの大自然は、侵入者に対して常に冷酷な対価を要求したのである。

史実：三毛別熊事件とアメリカのグリズリー

歴史は開拓を整然とした叙事詩として語りたがる。しかし、当時のフロンティアを生きた人々にとって、自然とはときに剥き出しの殺意を持った怪異として立ちはだかった。

1915年（大正4年）12月、北海道苫前村の三毛別において、日本史上最悪の獣害事件が発生した。冬眠に失敗して飢えた巨熊「穴持たず」が、開拓民の粗末な板壁を破って集落を襲撃し、数日間にわたって婦女子を含む多数の住民を虐殺・捕食したのである。それは単なる動物の食害を超え、人間が築いた脆弱な文明の境界をあざ笑うかのような惨劇であり、北の原野に潜む底知れぬ闇の深さを開拓民たちに刻み込んだ。

太平洋の彼方でも、開拓民たちはグリズリー（ハイイログマ）の脅威に怯えていた。猟師や探鉱者たちがロッキー山脈の奥地へと踏み込んだとき、彼らは常にこの巨大な捕食者の影に怯えていた。

フロンティアの斥候ヒュー・グラスの壮絶な体験はその象徴である。サウスダコタの森で子連れ之母グマと遭遇したグラスは、全身を八つ裂きにされた。頭皮を剥かれ、肋骨を砕かれ、背中の肉を削ぎ落とされ、瀕死の状態で遺棄された。

グリズリーの恐ろしさは、その驚異的な生命力にあった。黒色火薬の弾丸を何発もそのぶ厚い筋肉と骨で受け止めながら突進を続け、相手を肉塊に変えるまで攻撃をやめなかった。

丸太小屋のなかで息を潜める北海道の開拓家族であれ、岩陰で血を流すアメリカの猟師であれ、彼らの遭遇は「文明の優位」という幻想を根底から打ち砕くものであった。どれほど精緻な地図を描こうとも、広大な原生林のただなかにおいては、野生の頂点捕食者こそが絶対的な主権者であった。

第6章：西部の無法者と雪の中の囚人

北の大地がもたらした心理的重圧の最たるものは、絶対的な絶望感であった。津軽海峡を渡らされ、網走をはじめとする集治監の看守に引き渡された囚人たちにとって、それはこの世の果てへの片道切符であった。明治政府は彼らを更生すべき人間としてではなく、ロシアの南下に対抗する軍事道路を切り拓くための、使い捨ての資材として扱ったのである。

荒れ狂う津軽海峡を越えることは、文明世界との完全な断絶を意味した。足枷をはめられた受刑者たちにとって、渡航の先に待っていたのは苛酷な行刑の現実のみであった。

彼らを監視する看守たちもまた、過酷な環境に追い詰められていた。零下二十度を下回る極寒、孤立無援の恐怖、脚気やチフスの蔓延、そして失うもののない囚人たちによる暴動の恐怖。看守たちの過酷な処遇は、単なるサディズムではなく、極限状況における彼ら自身の生存本能から生じたのもでもあった。弱みを見せれば、自分が殺される。暴力と恐怖による支配こそが、過酷な原生林のなかで秩序を維持する唯一の手段であった。

重い鉄の足枷によって二人一組で繋がれた囚人たちは、看守の号令と竹棒の打擲の下、原生林を切り倒し、岩盤を砕き、湿地に土を盛り続けた。粗末な食事と劣悪な衛生環境のなか、山間部の工事現場は事実上の野外処刑場と化していた。

北海道の内陸部に道路を貫く作業は、抵抗する大地との果てしない白兵戦であった。密集するクマザサの太い根は斧の刃を跳ね返し、泥濘のなかで丸太を運び続ける囚人たちの手足はひび割れ、血を噴き、それが氷点下の外気で瞬時に凍りついた。泥と汗に濡れた着物は、息を抜いた瞬間に板のように凍りつき、囚人たちの体温を容赦なく奪っていった。

落石や倒木による事故、過労死、凍死が日常茶飯事であった。落命した囚人たちは、自らが切り開いた道路の脇にそのまま埋められ、その上に路盤が築かれた。「囚人道路」と呼ばれる所以である。北海道の近代化の礎は、東京の官僚が描いた設計図のみならず、名もなき受刑者たちの無残な屍の上に築かれたのであった。

鏡像としてのアメリカ：炎熱の強制労働

明治の囚人たちが北の凍土で道路を削り出していた頃、アメリカ西部や南部においても、灼熱の下で同じ構図が繰り広げられていた。

網走や過酷な道路開削現場が日本の凍てつく流刑地であったとすれば、アリゾナの悪名高きユーマ準州刑務所や各地のチェーンギャング（鎖につながれた受刑者部隊）は、灼熱と砂塵の地獄であった。

そこでの苦役もまた、組織的かつ冷徹なものであった。四十度を超える烈日の下、足枷で繋がれた囚人たちが列をなし、石を砕き、鉄道の路盤を均し、荒野の街道を建設した。照り返す石灰岩の白光が網膜を焼き、アルカリ性の砂塵が肺腑を侵す。水は厳しく制限され、熱中症で倒れた者には容赦なく看守の鞭が飛んだ。

当時の準州刑務所や囚人部隊における死亡率は凄まじいものであった。熱射病、赤痢、マラリア、過酷な体罰によって、命を落とす者が後を絶たなかった。身寄りのない受刑者たちは、不毛な砂漠の墓地に粗末な木片の墓標とともに埋められ、歴史の闇へと消え去っていった。

太平洋の両岸において、脱走を企てる者の計算は全く同一であった。

留まれば、飢餓、病魔、あるいは暴力による緩慢な死が待っている。しかし脱走すれば、過酷な自然の猛威が立ち塞がる。北海道の逃亡者は、見渡す限りの雪の迷宮と飢えたヒグマの前に力尽きた。アリゾナの脱走者は、一滴の水もないソノラ砂漠の炎熱の前に干からびた。

彼らは決して英雄的な逃避行を演じていたのではない。剥き出しの絶望から逃れようともがく生身の人間であり、北の氷に閉ざされようと、南の砂塵に焼かれようと、国家という檻から脱出しようとする人間の意志の過酷さを物語っていた。

北の吹雪を行軍しようと、南西部の焦熱地獄で石を砕こうと、両国の辺境開拓を支えたのは、こうした使い捨ての労働力であった。ロシアの脅威に対抗するために北海道の軍用道路を急造した明治政府も、大陸横断鉄道の建設や鉱山開発を急いだアメリカの資本と国家も、人間の肉体を帝国のインフラを築くための代替可能な資材として消費した。

最終的に、フロンティアの自然そのものが、国家に代わる冷酷な処刑人となった。生き残るとは、慈悲なき風土に対する不断の抗いであり、二つの帝国が築き上げた近代の繁栄の底には、原野に消えていった無数の人々の骨と血が、今なお沈黙のまま眠っているのである。

用語集

ワイアット・アープ

(1848～1929) アメリカ西部の法執行官。1881年、アリゾナ準州トゥームストーンでの「O.K.コラルの決闘」で知られる。

クラントン家、マクローリー家

トゥームストーン周辺の牧場主一家。「カウボーイズ」と呼ばれた無法者の一派と結びつき、アープ兄弟と対立した。

O.K.コラル

トゥームストーンの馬囲い（貸し馬屋）。1881年10月26日、その近くでアープ兄弟とドク・ホリデイが、クラントン、マクローリー側と撃ち合った。

コチス郡

1881年に創設されたアリゾナ準州南東部の郡。当時の郡庁所在地はトゥームストーン。

スケルトン・キャニオン

アリゾナとニューメキシコの境界付近にある峡谷。1886年、アパッチの指導者ジェロニモが米軍に投降した地。

ピンカートン

1850年代にアラン・ピンカートンが創設したアメリカの私立探偵社。鉄道や企業の警備、無法者の追跡を請け負った。

ウェルズ・ファーゴ

1852年創業のアメリカの運送・金融会社。駅馬車による郵便や金銀・現金の輸送で西部に広く知られた。

ユマ準州刑務所

1876年、アリゾナ準州ユマのコロラド川沿いに開設された刑務所。1909年に閉鎖された。

ヒュー・グラス

アメリカの毛皮猟師・斥候。1823年にグリズリーに襲われて重傷を負い、仲間に置き去りにされながらも生還した。

準州

州に昇格する前の合衆国の領域。連邦議会の管轄下に置かれた。アリゾナが州になったのは1912年。